

鎌倉時代～南北朝時代・室町時代まとめ

鎌倉幕府の基礎がゆらぎ始めると、後醍醐天皇は幕府を倒そうとします。足利尊氏など有力御家人が天皇方について1333年に鎌倉幕府は滅びました。この天皇は年号を建武とあらためて、建武の新政という新しい政治を始めました。しかし、公家だけを重んじた政治には武士の不満が出て、武家政治の復活を望む声が高まりました。これを受けて足利尊氏が兵を挙げ、京都に別の天皇を立て、京都に室町幕府を開きました。地方の守護は国内の武士をしたがえて国司のかわりに領地を支配するようになりました。これを守護大名といいます。後醍醐天皇は奈良の吉野に逃げだしました。この人の逃げ足の速さは抜群だったそうです。こうして京都と吉野の2つの朝廷が対立する南北朝時代が始まり、その後約60年間続きます。この間、武士たちは京都の北朝か吉野の南朝について戦いました。この戦いを南北朝の争乱といいます。

3代将軍足利義満のころ、南朝がおとろえて南北朝が統一されました。また、彼は中国(明)との貿易を始めました。貿易船は、このころ問題になっていた海賊(倭寇)と区別するための合札をもっていたので、この貿易を勘合貿易と呼びました。日本は明から銅銭や生糸を輸入し、明へは銅を輸出しました。このころ、朝鮮半島では李成桂が高麗をたおして朝鮮国を建てました。3代将軍は金閣寺を建てたことも覚えておきましょう。

京都では、守護大名の山名氏と細川氏の争いに將軍家のあとつぎ争い等が結びついて、1467年に応仁の乱が始まりました。この戦いは11年も続いて京都は焼け野原となり、幕府の力はおとろえました。他にも、守護大名を追い出した山城国一揆や、浄土真宗(一向宗)の信者たちが幕府や守護大名との戦いに勝利して100年近く自治を続けた加賀の一向一揆が有名です。このように下の者が上の者に実力で打ち勝って地位をうばう風潮は下剋上と呼ばれて社会全体に広がっていき、実力で一国の支配者になる戦国大名があらわれるのです。この大名は、領国を支配するための分国法を作り、自分の住む城を建てて、城のまわりに城下町を作りました。

新しい武器(鉄砲)を使って天下統一を目指したのが織田信長です。彼は桶狭間の戦いで今川義元をやぶった後に京都へ入り、足利義昭を將軍にして自分は実権を握りました。その後足利義昭を追放して室町幕府をほろぼしました。長篠の戦いでは、この新しい武器を活用して、甲斐の武田氏をやぶりました。また、座がもっていた商工業の独占権を取り上げて商工業の発展をうながしました。これを楽市・楽座といいます。しかし、天下統一直前に、本能寺で家来の明智光秀に攻撃されて自害しました。家来の豊臣秀吉はすぐに明智光秀をたおし、天下統一をなしとげました。彼は、太閤検地をおこなって田畑の生産量(石高)を記録して税(年貢)の基準をつくりました。また、一揆を防ぐために農民から刀ややりを取り上げました。これを刀狩といいます。これによって武士と農民を区別する兵農分離がすすみ、身分の区別が強まりました。